

## 第八講 日本における西洋史学の流れ

### 講座派と労農派の論争

#### コミンテルンの「27年テーゼ」

未成熟な資本主義・半封建的国家

君主制（「33年テーゼ」では天皇制）

二段階革命

プロレタリアートや農民の主導権

日本において資本主義的關係は成熟していたのか

講座派：明治維新：封建的土地所有の単なる再編

絶対主義、半封建的地主制・近代資本主義社会

二段階革命論：ブルジョワ民主主義革命→社会主義革命

野呂栄太郎、平野義太郎、山田盛太郎、羽仁五郎、服部之総ら

『日本資本主義発達史講座』（1932-33）

→大塚久雄

労農派：明治維新：不徹底なブルジョワ革命

資本主義の発展

天皇制：ブルジョワ君主制

一段階革命論

堺利彦、山川均、猪俣津南雄、荒畑寒村、向坂逸郎ら

『労農』

→大内兵衛、宇野弘蔵

### 階級闘争史観

日本社会の非合理性・後進性を強調し、革命による近代化を希求  
英米などの西欧を理想化

革命史への傾斜

清教徒革命・アメリカ独立革命・フランス革命・二月（三月）

革命

ロシア革命

ワット・タイラーの乱やジャックリーの乱・スパルタクスの乱  
国民史の枠を超えず

## 大塚史学

大塚久雄（1907－1996）

東京大経済学部

『近代欧州経済史序説』時潮社、1944年。

『共同体の基礎理論』岩波書店、1955年。

マルクス経済学とウェーバー社会学

国民史の枠組みの中の近代化

独立自営農民（ヨーマン）層の解体

産業市民層の台頭

高橋幸八郎（1912－1982）

東京大学社会科学研究所

『市民革命の構造』お茶の水書房、1950年。

近代化への二つの道：「封建的土地所有者＝前期資本家層」の主  
導する道

「独立自営農民＝産業的中産者層」の主導する道

との対抗

アンシャン・レジーム期のブルジョアジー：既存体制に癒着

## 社会史への転換

阿部謹也（1935－2006）

一橋大学出身

ドイツ中世史

上原専禄（ヨーロッパ中世史）・増田四郎（ドイツ中世史）

『ハーメルンの笛吹き男 - 伝説とその世界』平凡社、1974年。

『ドイツ中世後期の世界 - ドイツ騎士修道会史の研究』

未来社、1974年。

伝承から歴史の核心を探る

聖ヨハネの日に起きた事件がコア

ネズミ取り男（漂泊の賤民）

アナル学派

二宮宏之などにより紹介

柴田三千雄、遅塚忠躬、二宮宏之「『社会史』を考える（社会史<特集>）」『思想』663、2-24頁、1979年。

二宮宏之・樺山紘一・福井憲彦（編）『叢書歴史を拓くアナル論文選1／魔女とシャリヴァリ』新評論、1982年。

『家の歴史社会学』1983年、『医と病い』1984年、  
『都市空間の解剖』1985年

『社会経済史年報 *Annales d'histoire économique et sociale*』誌

大人物ではなく民衆など名もない人々に目を向ける

長期持続、民衆の生活文化や、社会全体の「集合記憶」

政治的事件を表層と位置付ける

経済学、統計学、人類学、言語学などを利用

第一世代：リュシアン・フェーヴル『ラブレールの宗教』：「集合心性 (mentalités collectives)」を扱う

マルク・ブロック『王の奇跡』

第二世代：フェルナン・ブローデル『地中海』（博士論文：原題

『フェリペ2世時代の地中海と地中海時代』）：波長の異なる三つの時間的うねりの組み合わせ。

長波（長期持続 *longue durée*）：長期にわたって維持される自然や環境、構造。

中波：局面、人口動態、国家、慣習。

短波：出来事。

第三世代：エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリ

数量史や価格史・歴史人口学など

人口動態の推移

A局面：17～18世紀前半・・・人口停滞

高出生率・高死亡率（特に幼児死亡）・・・平均年齢30歳未満

結婚の抑制・制限（高年齢での結婚。特に女性）・多数の独身者の存在

飢饉、栄養不良、疫病（天然痘・コレラ・ペストの流行）

ルイ 14 世時代のフランス

1 歳未満での死亡：25%

成人までの生存率：50%

40 歳までの死亡率：75%

松浦静山（平戸藩主・『甲子夜話』）

17 男 16 女

B 局面：18 世紀後半～19 世紀前半・・・人口急増

高出産率・低死亡率

結婚年齢の低下

医療の改善、海外からの食糧輸入、栄養の改善

階級による死亡率の差

日本の人口動態

奈良時代：451 万人、平安時代初期：551 万人、平安時代末期：684 万人、  
室町時代中期：1005 万人、江戸時代初期：1227 万人、江戸時代中期：3128  
万人、明治時代初期：3330 万人

（鬼頭宏『図説人口で見る日本史 縄文時代から近未来社会まで』PHP 研  
究所、2007 年より）

アナール以降

ミクロ歴史学（イタリア）

カルロ・ギンズブルグ：『チーズと蛆虫』

メノッキオという粉屋のおやじを対象